

後1週目の発現菌はグラム陽性球菌が多く、MRSA 3例、CNS 2例を中心とする11例(12%)であった。術後3週目の発現菌も11例であったが、やはりグラム陽性球菌が多かった。臨床検査値の異常および自覚的副作用は8例にみられたが、いずれも軽度であった。

12) IPM/CS および AMK が、有効であった M. chelonae subsp. abscessus による肺感染症

川島 崇・来生 哲(国立高田病院内科)

症例は、53歳、女性。高血圧・パーキンソン病等にて加療中であったが、結核の既往はなかった。平成3年12月より、夜間の咳嗽が続き、平成4年2月18日に、近医を受診し、検痰で、Gaffky 2号を指摘され、当院に紹介入院した。喀痰より、M. chelonae subsp. abscessus のみが分離され、胸部レ線では、両肺野に、浸潤影を認めた。抗結核薬全てに感受性無く、ディスク法により感受性のある AMK、IPM/CS の使用により、症状、胸部レ線像が改善し、排菌もみられなくなった。

M. chelonae subsp. abscessus による肺感染症は、稀であり、抗結核薬はすべて無効とされ、治療薬はないと云われている。しかし、今回の症例は、抗結核薬以外の抗生剤に感受性がみられたため使用して、有効であった。

13) 菌血症の予後について

和田 光一・瀬賀 弘行(新潟大学医学部)
荒川 正昭(内科学第二教室)

1976~1990年に当科で経験したのべ208例の菌血症の予後を検討した。

総計では、144例(69.2%)が除菌され、64例が死亡した。基礎疾患別では、白血病では除菌31例(57.4%)、他の血液疾患では除菌13例(61.9%)、悪性腫瘍では除菌10例(52.6%)、SLE、MCTDでは除菌18例(78.3%)であった。肺炎合併例は、除菌35例(49.3%)で、有意に予後不良であった。主な起炎菌別では、MSSAで除菌24例(96%)、MRSAで除菌11例(52.4%)、腸内細菌属で除菌39例(84.8%)、P. aeruginosaで除菌13例(46.4%)であった。死亡例における生存日数を検討すると、平均 5.1 ± 8.3 日であり、3日以内の死亡が40例(62.5%)であった。

この結果より、菌血症では血液培養判明前の empiric therapy における抗菌剤選択が最も重要であると考えられる。

II. 特別講演

「院内感染とその対策」

岩手医科大学医学部細菌学教授

川名 林 治 先生